ランチェスター法則発表 110 年によせて

～　その 1～

日本で広く知られるようになった５つの幸運

ランチェスター先生が 1914 年に法則を発表してから、2024 年の 10 月で 110 年になり、ランチェスター法則を説明した本が日本で最初に出版されたのは 1955 年 9 月で、それから 70 年になります。

これ迄、ランチェスター法則を経営に応用した本は何冊も出版されているばかりか、何人もの人が講演をしています。これらにより、日本ではランチェスター法則が多くの社長や役職者に知られています。

ところがランチェスター先生の母国イギリスでは、法則が経営に応用されてないばかりか、法則そのものが全く知られていません。

アメリカでは第２次世界大戦のとき、アメリカ軍はランチェスター法則を使って日本とドイツに勝っているのに、そのあと経営には応用されてないのです。

日本で、ランチェスター法則が広く知られるようになったのには、「５つの好運」があったからで、この事情は意外に知られていません。では、その事情を説明しましょう。

第１の好運。コープマンがランチェスター法則を応用

ランチェスター法則は、戦闘時における両軍の力関係はどのようにして決まるかということを、２つの公式で説明しています。

普通ならこの法則は、時間の経過とともに忘れ去られるところでしたが、好運にもそうはなりませんでした。

１次世界大戦が終わってしばらくしたとき、日本とドイツが着々と軍事力を強化しているのを見たアメリカの国防省は、「いずれ日本やドイツと戦争をすることになるだろう」と考え、その準備を始めました。

その１つが、プロジェクトチームの結成になります。

その方法は、まず数学者、物理学者、植物学者など、その道で「特別に高い能力」を持っている人を何人も集めたあと、６人～７人の、小さなチームをいくつも作ります。

そのあとチームごとにいろんな課題を与え、「最も都合がよい解決策」を考えてもらうというものです。この方法は後に「**オペレーションズ・リサーチ（Ｏ・Ｒ）**」と呼ばれ、新しい学問になりました。日本では「実際的問題解決法」と訳されています。

現在Ｏ・Ｒはいろんな分野で使われており、解決すべきテーマの内容にもよりますが、ランチェスター法則はよく使われています。ではその事例をいくつか説明しましょう。

戦略攻撃力に 67%、戦術攻撃力に 33%を配分

アメリカ国防省はあるプロジェクトチームに対して、次の研究課題を与えました。

それは「もし日本と戦いをすることになった場合、どのような戦い方をすると、最も効果的に勝てるか」というものでした。

プロジェクトチームの一員であったバーナード・コープマンは、「ランチェスター法則とゲームの理論」の２つを組み合わせて、戦略モデル式を考え出しました。

コープマンはこのモデル式を使い、アメリカが日本に向ける軍事予算のうち、３分の２を戦略爆撃用に配分し、３分の１を戦術攻撃用に配分すると、最も効果的に日本に勝てるということを提案しました。

この提案によって開発されたのが、Ｂ－29 の戦略爆撃機だったのです。Ｂ－29 は片道 3000 ㎞を飛行し、５トンの爆弾が積めました。現実の戦争ではこのとおりになりました。

コープマンが考え出した戦略モデル式は、1962 年、日本で市場占有率の数値計算に応用され、大きな成果を出しています。

これ以外にプロジェクトチームは、必勝の数学的な条件や、神風特攻機の被害を少なくする「オトリ対策の考案」、それにドイツのＵボート対策など、いくつもの方法を提案して成果を出しています。

（続く）

Lanchester ランチェスター経営（株）

〒810-0012　福岡市中央区白金 1-1-8　チュリス薬院 301

TEL　092-535-3311　FAX　092-535-3200

メールアドレス customer@lanchest.co.jp　HP　https://www.lanchest.com